教諭活動と測定・検査論

非常勤講師　内山伊知郎

１．学校における測定と検査

大学院の講義で測定･検査論を担当して３年目となる。多くの受講生が修士論文研究にむけて、主にその基礎知識と技術の習得を目的として受講されており、学校場面における子どもや教諭の心理現象を科学的に捉えるために測定法が重要であることが再認識された。講義では、測定のための基礎統計や多変量解析の基礎を教える。記述統計、推測統計、多変量解析と多彩な統計を、さまざまな専門の院生教諭に教えることになる。学部からの進学者のみではなく、学校現場の教諭が大学院で学び、教室場面の教授法や発達障害に関する諸要因を分析する。そのため、実践的な課題をテーマとしており、修士論文の統計に関する相談を受けても興味深いテーマが多い。教室で関心のある心理現象を測定するには従来からの心理テストでは間に合わないことも多く、自ら新たに開発を試みることにもなる。そこでは、教員生活であまりなじみのない統計を使用することになるわけである。最近は統計パッケージが普及しており、SPSS や SAS を使用するとそれほど苦労はないはずであるが、苦戦する場合も多く、やはり「習うより慣れろ」というように、頻繁に使用することが大切なようである。

大学院で教育を修めた教諭が、新たな学校現場に参入したり、再び校務に戻ってから、科学的な統計手法を利用しながら学級・学校運営に参画したりすることは、教育改善によい効果をもたらすに違いない。新しい教育手法あるいは支援手法を導入した時に、その効果を経験のみでなく、子どもの意識や行動評定から逐次、科学的に確認していくことは、教育の効果測定の基本である。経験豊かな教諭でも、その経験のみに頼らず、科学的に事象を捉える姿勢を持ち続けてほしいと考える。

２．学校における統計のためのコンピュータ環境

さて、統計とコンピュータ技術を習得した教諭が院生活を終え学校現場に戻った後、コンピュータの利用環境はいかがであろうか。コンピュータは普及しているが、SPSS のような統計パッケージは比較的高価であり、また、年々バージョンアップされていくので、常に身近に利用できるようにはなっていないのが実情である。大学教員でも大学の研究環境を離れれば、容易にアクセスすることは難しい場合が多い。

身につけた技術を大学院修了後も利用し続けるために、例えば、大学院の卒業生には外部からも容易にアクセスして利用できる環境が普及すれば、教育現場での学術性は一層高まると考えられる。また、利用に際しての講習を大学で定期的に実施することがそれを保証することになる。これは、大学院で学んでいない教諭にも波及効果をもたらすことが容易に想像できる。小・中・高校などの教育現場と大学における研究環境を密接にリンクすることが昨今の教員の技術向上と連携して日本における教育の質を高めるための一助となる。各地域の学校現場での研究環境が一層整うことを願っている。